

<論文>

「共同行為における自己実現の段階モデル」による
「地域の居場所」の来場者の行動分析
東京都港区「芝の家」を事例に

An Analysis of Visitor's Behaviors in Local Community Place
Based on Stepped Collaborative Self-Actualization Model

坂倉 杏介

Kyosuke SAKAKURA

保井 俊之

Toshiyuki YASUI

白坂 成功

Seiko SHIRASAKA

前野 隆司

Takashi MAENO

地域活性学会

地域活性研究 Vol.4 (2013年3月) 抜刷

「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析

東京都港区「芝の家」を事例に

An Analysis of Visitor's Behaviors in Local Community Place Based on Stepped Collaborative Self-Actualization Model

坂倉杏介*・保井俊之**・白坂成功**・前野隆司**

(*慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所、**慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)

Kyosuke SAKAKURA, Toshiyuki YASUI, Seiko SHIRASAKA, Takashi MAENO

(* Keio University Global Security Institute, ** Graduate School of System Design Management, Keio University)

要旨

近年、コミュニティ形成や協働の場として「地域の居場所」が注目されている。本研究は、地域の居場所における来場者のつながり形成や自発的な活動の創出メカニズム解明するため、共同行為を通じた自己実現の段階的過程として分析するモデルを提案する。東京都港区の地域コミュニティ拠点「芝の家」の来場者を対象に、「共同行為における自己実現の段階モデル」に基づくアンケートとインタビュー調査を実施した結果、来場者が自発的な活動を開始するまでには、共同性と自己実現の3段階の進展があると考えられること、それを促進する要因は、他者との関係を通じた内的動機づけの変化、一定の時間的猶予、スタッフのサポートが重要であることが明らかになった。

キーワード コミュニティ形成、芝の家、協働のまちづくり、自己実現、共同性

研究の背景と目的

本格的な少子高齢社会を迎える現在、地域課題を主体的に解決し、市民の支え合いの基盤となる地域コミュニティの形成が、地域活性化の重要な課題の一つとなっている。

こうしたなか、「ふれあいの居場所」、「コミュニティカフェ」、「まちの縁側」等と呼ばれる、様々な人が気軽に出入りし自由に交流できる小規模の地域コミュニティの拠点（以下「地域の居場所」と総称する）が増加している（大分大学福祉科学研究センター2011）。地域の居場所は、公共政策の手が届きにくい住民一人ひとりのきめ細かなニーズに応え、地域の様々なレベルのつながりを形成し、多様な住民が主体的に課題解決に取り組むための契機となっている事例が多い。

2000年代後半からこのような地域コミュニティの拠点は学術的にも、自治体・NPOの戦略的協働（岡田ら2006）や連携・協働の場づくり（山浦2010）等のアプローチで取り上げられている。この背景には、地域活性化の方策に関する政策提言が、かつてのような産業集積やイベント中心の政策から、地域の居場所を形成し、自治体・NPOの協働を志向する政策へと変化していることがある（津々木ら2011）。まちづくりの方法論の主流も、かつてのようなハード重視からソフト重視へと転換している

（久繁2008、黒澤2012）。地域活性化の推進力は最近では、地縁・血縁・選択縁（大江2008）、人的ネットワーク（木村2008）、社会関係資本（細川2008、諸富2010）など、地域住民が安心・安全を感じ、帰属意識を感じられる「場」（Nonaka and Konno 1998）を自治体・NPOが協働して形成していくアプローチであると認識されるようになってきている。

しかし、地域の居場所からつながりや活動が生じる過程や、設計・運営するための方法論、そして活動が地域住民の自発的なネットワークや社会関係資本の回復、さらに地域活性化にどうつながるかについては、まだ十分に解明されていない。

本研究では、地域コミュニティ拠点「芝の家」を調査対象に、来場者のつながり形成や自発的な活動の創出メカニズムを、共同行為を通じた自己実現の段階的進展の結果として分析することで、市民の自発性を活かした地域活性化に向けた一つのモデルを提案する。

研究方法

本研究の方法は、次の通りである。まず、地域の居場所の来場者が主体的に活動を始める過程を解明するため、共同性と自己実現の段階的進展から来場者の行動変化を分析する「共同行為における自己実現の段階モデル」を

構築する。続いて、本モデルに基づき、「芝の家」の来場者を対象に実施したアンケート調査から抽出した、共同性・自己実現段階の高い来場者に対して半構造化インタビューを実施する。さらに、初来場時から活動を始めるに至るまでの過程を本モデルによって検証し、来場者の行動変化の段階と要因を考察する。

1. 「芝の家」の概要

(1) 沿革

「芝の家」は港区芝地区総合支所と慶應義塾大学の協働による地域コミュニティ形成事業「昭和の地域力再発見事業」の拠点として、2008年10月に港区芝三丁目に開設された。以降、子どもから高齢者まで誰もが自由に立ち寄れる居場所として定着し、地域内外の人たちの出会いから多彩な地域活動が行われ、地域の個人や組織間のインフォーマルな関係を生み出している(坂倉 2010)¹⁾。

「芝の家」は、他の地域の居場所と同様、学生や近隣住民ら一般の市民によって運営されており、また様々な人が出入りする自由な雰囲気のある典型的な地域の居場所の一つであることから、本研究で取り上げる事例としてふさわしいと考えられる。



図1. 芝の家の外観(左)と内観(右)

(2) 利用実態

「芝の家」の2011年度の来場者数は、9,659人、1日あたり34.4人であり、このうち65歳以上、大人、高校生以下の3属性別の割合は、17%、54%、29%であった。2011年末に来場者とスタッフを対象に実施したアンケート調査(慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所2012)によると、交通手段は徒歩が69%、所用時間5分以内が61%と徒歩圏内からの来場が最も多いが、鉄道利用が19%、所用時間30分以上が16%と比較的遠距離から通う人も少なくない。過ごし方は非常に多様で、「気分転換」、「散歩の途中の休憩」、「雑談や交流」など、特に目的でない休憩や交流が56%と最も多く、続いて「イベント準備」や「町内会の用事」など地域活動を目的とする利用が22%、「イベント参加」や「趣味の活動」が20%であった。「芝の家」では、近隣住民だけでなく地域外の多様な人が集い、主に休憩や交流を目的に過ごしている。この点が、特定の目的のために利用される公共施設とは異なる地域の居場所に特徴的な利用形態だといっ

てよい。

来場者の多くは、「芝の家」を訪れることで、「元気がなった」(71%)、「地域のつながりが得られた」(73%)、「地域への関心が高まった」(76%)など意識変化があったと回答している(いずれも「感じる」「少し感じる」の合計)。また、「はじめて知り合った人がいる」人は95%、その関係が「信頼できる」と答えた人は75%であった。さらに、94%が「芝の家」の運営やイベント協力、地域活動や助け合い活動など、何らかの新たな行動を「芝の家」がきっかけとなって始めた。少なくとも来場者にとっては、「芝の家」が健康の快復や孤立感の低減に寄与し、つながりの増加や信頼関係の醸成、互恵的な行動といった社会関係資本を培養する契機になっているといえる。

(3) 「芝の家」を拠点とした地域活動

「芝の家」ではさらに、来場者同士の出会いから様々な継続的な地域活動が行われている。近隣の子どものからお年寄りまで、一緒に花や野菜の鉢植えを育て軒先に設置し、環境緑化と交流を生み出す「コミュニティ菜園プロジェクト」、親以外の地域の多様な人が子育てに参加できる仕組みづくりを行う「芝でこそ：芝で子育てしたくなるまちづくりプロジェクト」、近所付き合いを支援するソーシャルメディアの新しい形を、住民参加型ワークショップを通じて探る「つながるご近所プロジェクト」など、10件以上の大小さまざまな活動が継続的に行われている(慶應義塾大学教養研究センター2012)。こうした活動の特徴は、学生からシニア層まで地域内外の多様な市民のつながりから自然発生的に生じ、様々な施設や組織と柔軟に連携した公益的な活動となっている点である。活動を通じてさらにつながりが広がり、地域コミュニティのなかにきめ細やかな信頼関係が形成されている。

2. 「共同行為における自己実現の段階モデル」

(1) モデルの概要

特定のサービスを提供せず、来場者の過半数が休憩や交流を目的に過ごしている「芝の家」で、上述したような活動が次々と活発に始まるのはなぜだろうか。

「芝の家」で活発に活動している来場者は、特定の行動的な来場者のみではなく、その担い手は学生からシニア層までまちまちである。また、初めての訪問時から直ちに活動を始めることはなく、徐々に「芝の家」に馴染んでいき、ある時期から運営の手伝いや独自の活動を始めていくように見える。さらに、こうした行動を促す要因は、対価や尊敬の獲得といった外的動機づけ、あるいは

地域課題の解決や個人的関心の充足といった単一の目的であるというよりは、様々な形で他者との出会いや信頼関係の構築、自分らしさへの気づきなどを通じた内的動機づけといった複合的な要因が絡み合った結果としての変化であるように観察される。

来場者が主体的に活動を始める複合的な誘因を解明するため、ここでは、「共同行為における自己実現の段階モデル」(図2)を用いて考察する²⁾。

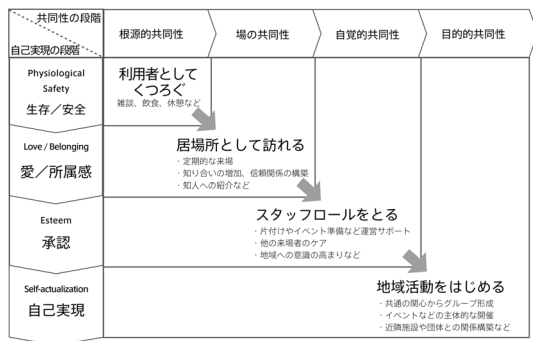


図2. 共同行為における自己実現の段階モデル

本モデルは、来場者の行動を、「利用者としてくつろぐ」状態から、次第に「居場所として訪れる」、「スタッフロールをとる」、「地域活動をはじめるといった形で段階的に発展する過程として捉え、それを促進する要因を、他の来場者との信頼関係の構築による共同性の深まりと、他者との関係を通じた自己実現意欲の高まりの2つの要素から説明しようとする枠組みである。

(2) 行動段階の設定

・来場者の行動段階

本モデルで設定した行動の4段階は、次の通りである。「利用者としてくつろぐ」段階は、お茶を飲んで雑談したり休憩したりと、一利用者として過ごしている状態である。次の「居場所として訪れる」段階は、定期的を訪れるようになり、他の来場者とのネットワークや信頼が増加する段階、「スタッフロールをとる」段階は、片付けやイベント準備などの手伝いや他の来場者の世話を焼くといった運営上の役割を担うようになる段階である。そして「地域活動をはじめるといった形で」段階は、共通の関心から他の来場者とグループを形成し、イベントの開催など主体的活動を行うようになる段階である。

こうした行動を促進させる共同性と自己実現の段階として、共同性については主に田中重好(2010)による共同性の段階的発展モデルを参照し、自己実現については、Maslowの欲求段階説(1954)を援用して設定した。

・共同性の段階

社会学における共同性概念を研究する田中によれば、地域社会の前提となる共同性には4つの段階があるという。4段階とは、人間同士の本質的な共感性に基づく「根源的共同性」、地域などをともにしているという潜在的な「場の共同性」、ひとつの共同体に属しているという認識を共有している「自覚的共同性」、目的を共有しそれに向けて協力しあう「目的的共同性」である。目的的共同性は、前者の要素を引き継ぎながら後者へ段階的に進展した最終形として成立し、公共性の基盤になるという。

この段階モデルは、地域コミュニティの成員同士の関係の発展段階を区分する指標としてふさわしいと考えられるが、ここでは来場者一人ひとりの行動の分析に用いるため、共同性概念の各段階を来場者の他者と結ぶ関係や行動に具体的に置き換えた(表1)。

・自己実現の段階

人間の行動の誘因となる動機づけは、賞罰など外的要因、自己実現といった内的要因、評価や達成要因、生理的要因などが挙げられるが、「芝の家」での活動を、報酬や与えられた課題の達成といった動機から考察することは難しいと考えられることから、自己実現に焦点を当てて段階を設定した。

自己実現概念は、Goldstein(1939)、Rogers(1942)の思想を基盤に、Maslow、McGregor(1960)らが企業経営など実践理論として応用し、一般化している。ここでは、Maslowによる生存、安心、愛・所属感、承認、自己実現の5段階の自己実現理論を援用する。Maslowの理論の特徴は、下位の欲求がある程度満たされるとより高次の欲求への動機づけが生じるという動的な階層構造である。全人格的な成熟や個々の行動の要因分析ではなく、来場者の意識や行動が数ヶ月から数年という期間のなかでどのように変化するかを分析するためには、最適な尺度であると考えられる。

なお、本モデルでは、現代社会においては生命的危機を感じる場面は少ないことから、生存と安心を集約し、4段階の構成とした。

・共同性と自己実現の段階の定義

来場者の共同性と自己実現の段階を、表1のように定義した。各行動段階は、共同性と自己実現の段階の複合によって説明される。例えば、「利用者としてくつろぐ」段階は、他者との根源的な共感性に支えられ、存在が脅かされない状態であり、「居場所として訪れる」段階は、定期的を訪れるとともに顔見知りが増え、所属感を得られている段階である。

表 1. 共同性と自己実現の段階の定義

	共同性の段階	自己実現の段階
利用者としてつづく	1) 根源的共同性 初めて訪れた来場者や、二度目以降の来場ではあるものの、まだスタッフなどに一方的にケアされる「お客さん」の状態。居心地のよさを感じていても自発性は低く、様子見の状態。しかし、何らかの価値や期待を感じており、その場にいることは苦痛ではない。	1) 安心、安全 この場においてもよいと感じられる。休憩や雑談など自由に過ごしてもとがめられないという安心感を感じる。他の組織やコミュニティにはない居心地を感じる。
居場所として訪れる	2) 場の共同性 生活サイクルのなかで位置づけられ、定期的に訪れる。芝の家を通じた知人が増え、ネットワークがはじめる。悩みごとを相談する相手や、芝の家の外部で付き合う知人ができる。運営の手伝い、イベント準備など受動的な協力をはじめる。	2) 愛/所属感 場への好意的感情が高まる。来場が楽しみになり、自分の居場所として愛着を感じられるようになる。芝の家で知り合った人への信頼感、好意的な感情がおこり、受け容れられている実感を得る。悩みを相談できる仲間ができ、孤独感は低下する。雰囲気、新たな人との出会い、情報の取得、研究的関心など来場動機が多様化する。
スタッフロールをとる	3) 自覚的共同性 芝の家のネットワークの一部、あるいは協力者であるという意識が強まり、運営の手伝いや他の来場者の世話など、自立的に判断し、役割を担う行動（スタッフロール）を起こす。芝の家の理解が進み、それに応じて地域への意識の高まりが見られるようになる。運営に対する意見を述べる。	3) 承認 役に立ちたいと願い、役割を担う喜びを感じる。自分の個性を自覚し、自己肯定感・自己効力感を得る。自己信頼感が高まり、他者と関わることへの心理的障壁が低くなる。信頼関係の構築や互恵的行動による満足を得られるようになる。芝の家以外での行動や人間関係の変化が起き始める。他者との対決や葛藤を通して自己への気づきを得る場合がある。
地域活動をはじめ	4) 目的的共同性 ある目的を共有するグループが形成され、これまでになかった活動を主体的にはじめる。イベントの企画制作、他の来場者のサポートや運営などを主体的に担うようになる。対外的な交渉や講演を担うようになる。	4) 自己実現 初めへの試みに挑戦し、自分の個性や関心を十分に発揮できる行動が見つかると。自分が求めていたこと、やりたかったことはこれだ、という意識が生じる。自分の行動が他者の幸福につながる実感を得る。ビジョンを共有する仲間を得た喜びを感じる。行動に躊躇が少なくなり、自由な自己表現ができる。芝の家での活動が自分のアイデンティティの一部になる。

(3) 関連研究と本モデルの特徴

共同性と自己実現に関して様々な分野の研究が行われているが、両者を関連づけた研究や行動分析に応用した研究は多くはない。

地域活動やボランティアにおける動機づけの研究としては、援助行動が援助者に与える心理・社会的影響から活動の継続要因を明らかにする妹尾らによる研究では、「自己志向的動機」、「他者志向動機」、「活動志向動機」がその要因として挙げられている。また、星野ら (2000) は、地域活動組織において、活動の満足感やボランティアへの関心が、自尊感情、自己効力感、自己実現的価値観と相関することを指摘している。

心理学では、共同性がどのようなパーソナリティ傾向と関連づけられているかについての研究がある。パーソナリティ分析の手法として一般的になっている 5 因子論 (Goldberg1992) では、その一つの因子である「調和性」(agreeableness) が共同性を実現しやすい傾向と考えられている。また、Adler の個人心理学の鍵概念である共同体感覚(1927)を測定するための尺度として高坂(2011)は、所属感・信頼感、自己受容、貢献感を挙げ、自己愛傾向が共同体感覚と正の相関を示す場合があるとしている。

これらの関連研究から、これまで共同性や利他的行為と相反すると考えられてきた自己肯定感や自己実現感覚

といった個人的価値が、社会活動の動機づけの一部を形成していると考えられるようになってきている。

本研究は、こうした先行研究の延長に位置するといえるが、共同性と自己実現欲求の関連を直接解明するのではなく、それらを援用しつつ、具体的な地域の現場での数ヶ月から数年に渡る人々の行動変化の動機を捉える点に特徴がある。また、その動機を、属性や性格傾向といったパーソナリティの問題、報酬や評価など外的要因ではなく、複数の人々との関係の中に内在的・事後的に生じ、現在の段階が充足することによって次の段階に進む動機づけが生まれるというダイナミックな関係性として捉えるモデルを提示する点で新しいといえる。

3. 調査方法

まず、2011 年末に来場者 92 名に対して行ったアンケート³⁾の結果から来場者の意識や行動変化を抽出し、「共同行為における自己実現の段階モデル」に各々の段階を位置づけた。本アンケートは、来場者の利用実態や来場後の意識・行動変化を調査する目的で実施され、記述式の設問や基本的属性を訊ねる項目を含め 37 項目からなる。このうち、「普段、どのように芝の家で過ごしていますか?」、「来場のきっかけや動機、その時の印象は?」、「芝の家を訪れるようになって、ご自身の生活や意識などが変わったと感じますか?」、「芝の家を訪れるようになって、ご自身が『元気』になったと感じますか?」といった項目を主に参照し、表 1 の定義を照らし合わせて来場者それぞれの段階を特定した。

次に、共同性と自己実現の段階がともに高い値を示した来場者に対するインタビューを実施し、初来場から地域活動を始めるまでにどのような促進要因があったかを聞いた。インタビューは半構造化面接の形式を取り、アンケートから抽出した内容を確認しながら、はじめて「芝の家」を訪れてから現在までを振り返る形で進めた。所要時間は、約 1 時間であった。

結果

1. 「共同行為における自己実現の段階モデル」分布

アンケート調査に基づいた評価の結果は、表 2 の通りであった。概ね左上から右下に分布しており、共同性と自己実現の段階的発展には相関関係があると考えられる。共同行為が 3 段階目まで進んでいるが、自己実現の段階は低い(段階 1)と位置づけられる 5 人は、町内会役員など主に地域活動の協力者として関わる人である。

表 2. 「芝の家」における共同行為と自己実現段階の分布 (n=92)

	根源的共同性	場の共同性	自覚的共同性	目的的共同性
生存、安心	8		5	
愛／所属感	4	16	20	1
承認			14	6
自己実現				18

2. インタビュー結果

次に、主体的に活動を行っていると考えられる人（目的的共同性／自己実現の段階にある人）のうち 10 人に対して行ったインタビューの結果から、初来場から現在に至るまでの変化の過程を図式化した。インタビューの内訳は、20 代 3 人、30 代 3 人、40 代 4 人、50 代 1 人、60 代 1 人で、男性 2 人、女性 8 人である。図 3、4 に代表的な事例を示す。

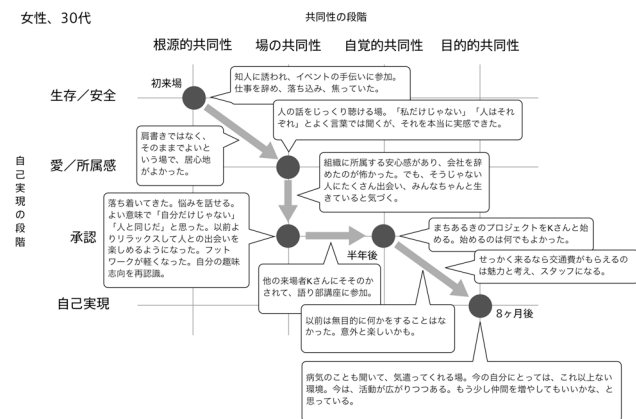


図 3. インタビュー結果の事例 1

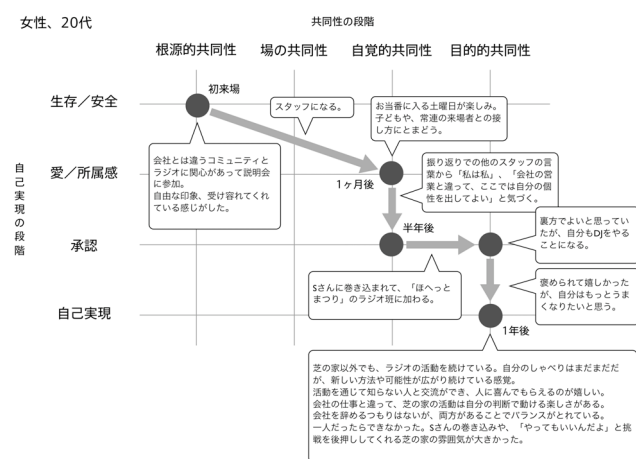


図 4. インタビュー結果の事例 2

図 3 の来場者は、繰り返し「芝の家」に来るうちに他者との関係や内的な気持ちの変化を感じ、他の来場者の誘いをきっかけに主体的な行動を行うようになった。現在は、自分の体調も含めるとこれ以上ない環境で活動で

きていると感じている。

図 4 のケースでは、「芝の家」で行われていた活動に関心があり、初来場時に受け容れられた感覚があったことからスタッフになり、定期的に訪れるようになった。スタッフとして脚を運ぶうちに自分らしさを表現できるようになり、他の来場者の誘いから活動に参加、そこでの活躍が評価されたことが主体的に活動を続けようと思う動機づけになったという。

人によって順序に前後はあるが、ただの来場者から自発的活動を起こす転機になるのは、他の来場者やスタッフの働きかけ（図の右側への動き）や、自分の関心や課題の深まり（下へ向かう動き）であり、双方が組合わさることで行動の段階が進展していることがわかる。

考察

1. 共通する発展段階

インタビューの結果をもとに、複数のケースに共通する過程をまとめたのが図 5 である。全てのケースに共通する特徴として、次の 3 つの段階の進展が起こることが最終的に主体的活動に取り組むための鍵となっていると考えられる。

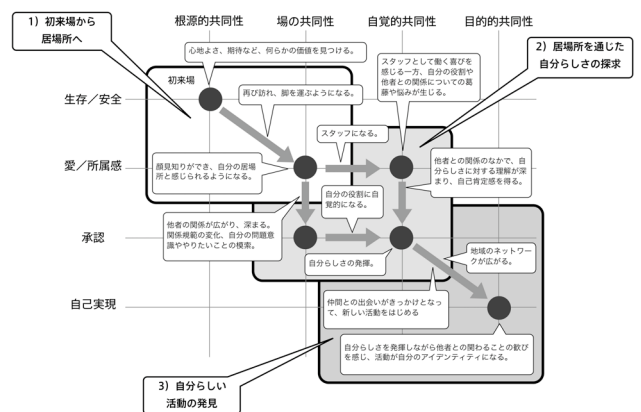


図 5. 活動にいたるまでの段階的過程

(1) 初来場から居場所へ

初来場時に、その場にいる安心感を感じられたり、自分の関心が満たされる期待感を持てたりすることが、再度来場するきっかけとなる。やがて、所属感を感じられる居場所となり、インフォーマルなつながりが増加する。脚を運ぶようになった理由として、「肩書きではなく、そのままでもよいという場で、居心地がよかった。(30 代女性)」、「子どもと遊んだり、いろいろな人と話すのが楽しかった (30 代女性)」、「ご近所の方と顔なじみになったことが嬉しかった。(30 代女性)」といった点が挙げられている。

(2) 居場所を通じた自分らしさの探求

続いて、インフォーマルなつながりのなかで、自分らしさや他者との関係への気づきが次第に深まる。多くの場合、半年程度かけて自分のやりたいことが明確になっていく。自分らしさの承認と、役割の形成が生じ、運営手伝いやイベント企画などの試行が行われる。「以前よりリラックスして人との出会いを楽しめるようになった。自分の趣味志向を再認識 (30代女性)」、「『私は私』、『会社の営業と違って、ここでは自分の個性を出してよい』と気づく (20代女性)」など、徐々に自分の強みや関心が自覚され、また「お世話になっているので何か役に立ちたかった (50代男性)」など、場への愛着が次第に役割を担いたいという欲求につながっていることがわかる。

(3) 自分らしい活動の発見

自分らしさへの気づきと信頼できるつながりが十分に形成されると、新しい活動への意欲が生じる。直接的な契機は、他者との関わりであることが多い。活動に踏み切ることで、近隣施設や組織とのフォーマルなつながりも形成されるようになり、活動が自分自身のアイデンティティになっていく。「Sさんに巻き込まれて活動に加わる。褒められて嬉しかったが、自分をもっとうまくやりたいと思う (20代女性)」、「一人でも進んで行くRさんの活動に影響を受ける。自分も活動を引っ張っていく動機になる (40代男性)」など、他の来場者の巻き込みや活動からの刺激が行動の契機になっている。また、活動が発展する要因として、「(活動をはじめるにあたって) 芝の家のスタッフだったから信頼してもらえたことは大きい (60代女性)」、「芝の家が認知されていることで、ネットワークがつくりやすく、活動をしている人との出会いから勇気を得られる (30代女性)」など、「芝の家」が個人の活動の発展を支援する地域とのインタフェイスとして機能している点も重要である。

2. 来場者の行動を促進する要因

来場者の活動促進する要因は、第一に、他者との関わりである。関心をともにする仲間との出会いや他の来場者による巻き込みや紹介が、勇気を持って一步踏み出す契機となっている。特に目的的不是な日常の「芝の家」から次々に活動が生まれる原動力は、来場者同士の関係性から生じる相乗効果であるといえる。

しかし第二に、来場者が主体的に活動に踏み切る準備が整うためには、ある程度の期間「芝の家」で過ごし、十分に自己に向き合い、信頼関係が構築されている必要がある。「何かをしてもしなくても構わない」という自由な雰囲気が、こうした時間的な猶予を生み出している。

そして第三に、段階に応じたスタッフのサポートが重要である。上述の「初来場から居場所へ」、「居場所を通じた自分らしさの探求」、「自分らしい活動の発見」というそれぞれの段階でスタッフが果たす役割は異なる。初来場時は、場に受け入れられている実感や居心地の良さを感じられるような配慮が大切である。居場所として訪れるようになった来場者に対しては、運営の手伝いを依頼するなど、役割を担っている手応えを感じられる機会を提供することが、主体性を獲得するために有効であると考えられる。さらに活動を始めたいと潜在的に感じている人に対しては、関心を共有する他の人を紹介したり、地域の施設や組織を結びつけたりといった役割が重要となる。

3. 地域活性化における地域の居場所の機能

ここまで、地域の居場所のなかで来場者が自発的な活動をはじめめる過程を明らかにしてきたが、地域活性化の視点から、こうした個人の行動変化を誘発する地域の居場所に期待される役割を検討する。

図6は、本研究で検証したモデルを地域活性化の文脈に援用し、地域の居場所の機能を概念的にあらわした図である。個人の心身の快復や自己実現の達成、地域のつながりの醸成、創造的な地域課題の解決は、一般に考えられているように独立しているのではなく、相互に作用しあった現象であるということが出来る。地域のなかに存在がおびやかされず安心して他者と過ごすことのできる居場所があることで、インフォーマルなつながりが生じ、その関係のなかで生きている実感を得ることが出来る。心身の快復と生き甲斐をインフォーマルなつながりの獲得を通じて感じられる居場所としての機能である。次に、所属感を感じられる場と人間関係が、自己承認や自己効力感を得られる活動をはじめるところをつくり、こうしたなかから広がる活動や組織間のネットワークの充実が地域の活性化につながっていく。これは、地域活動の拠点としての機能である。

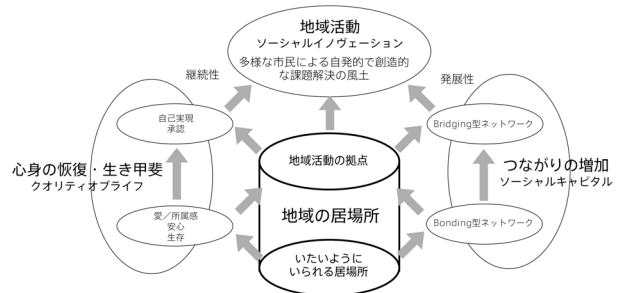


図6. 地域活性化からみた地域の居場所の機能

居場所であり地域活動の拠点でもあるという「芝の家」のような地域の居場所は、つながりの形成と自発的な活動が継続し、発展するための培養器のような働きを、地域コミュニティに果たしていると考えられる。また、自発的な活動を創出する地域の居場所は、地域活動に関心のある目的意識の高い人だけではなく、幅広い人が地域の様々な活動へ参入する機会を提供できる仕組みであるといえる。

本研究では、活発な活動を行うようになった来場者に焦点を当て、段階的な意識・行動の変化を分析することで活動の促進過程を考察したが、すべての来場者が同様に活動を始めるわけではない。なかには、初回の来場以降足を運ばなかった人、定期的に訪れていたがある時期から来なくなった人などが存在する。本研究では、ネガティブな行動要因については取り上げておらず、今後の課題として残されている。しかし、初来場時から自発的な活動の開始に至る過程を明らかにした本研究からは、そうならなかった要因についても、ある程度類推可能と考えられる。

まとめ

地域の居場所において、来場者が主体的に活動を始める要因を分析するため、「共同行為における自己実現の段階モデル」を構築し、「芝の家」の来場者を対象に検証した。その結果、活動を始めるまでには過程は次のような段階があることが明らかになった。まず来場者は、居心地のよさや自分の関心を満たせる期待を感じることで、居場所として訪れるようになる。次に、その関係性のなかで次第に自分らしさへの自覚が深まり、運営協力等の行動を試行する。自己や他者との関係が十分に深まると、自分らしい活動が見つかり、主体的に取り組めるようになる。発展の契機は、内的動機づけと他者との関係性の相互作用であり、それを促進するためには、一定の時間的猶予があることとスタッフのサポートが重要である。

地域コミュニティにおいて、つながりの形成と自発的な活動が継続し、発展するための培養器のような働きを果たす地域の居場所は、市民一人ひとりの内的動機づけを引き出し、自発的な活動を社会関係資本の蓄積につなげ、持続可能な地域活性化を実現するための有効な手法であるといえよう。

今後は、他の地域の居場所との比較調査を実施し、モデルの精査を進めるとともに、他の地域活性化施策の分析への応用を検討する予定である。

註

- 1) 筆者は、開設時よりスタッフのコーディネイトや来場者の対応など企画・運営に携わっている。
- 2) 「芝の家」における来場者の行動の観察から帰納的に導きだした仮説モデルである。
- 3) 慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所 (2011)。対象者には、その後スタッフになった来場者を含む。

引用・参考文献

- [1]Adler, A., 1927, Praxis und Theorie der Individualpsychologie : Vorträge zur Einführung in die Psychotherapie für Ärzte, Psychologen und Lehrer, J. F. Bergmann
- [2]Goldberg, L. R., 1992, The development of markers for the Big-five factor structure, Psychological Assessment 4 (1), pp2642.
- [3]久繁哲之助, 2008, 日本版スローシティ: 地域固有の文化・風土を活かすまちづくり, 学陽書房
- [4]細川甚孝, 2008, コラボレイティブ・リーダーシップ、ソーシャル・キャピタルによる地域再生, 片木淳ら編, 地域づくり新戦略: 自治体格差時代を生き抜く, 一藝社
- [5]慶應義塾大学教養研究センター, 2012, 芝の家プロジェクト記録: 2011年度 3人寄れば、地域がうごく?
- [6]慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所, 2012, 芝地区の新たなコミュニティ創造事業に関する調査研究報告書: 昭和の地域力再発見事業の評価
- [7]木村俊昭, 2008, 人的ネットワークによる地域再生, 片木淳ら編, 地域づくり新戦略: 自治体格差時代を生き抜く, 一藝社
- [8]北野収, 2008, 共生時代の地域づくり論: 人間・学び・関係性からのアプローチ, 農林統計出版
- [9]黒澤武邦, 2012, 都市再生とまちづくり, 片木淳・藤井浩司編著, 自治体経営学入門, 一藝社
- [10]Maslow, A. H., Motivation and Personality, Harpercollins College Div, 1954.
- [11]McGregor, D., 1960, The Human Side of Enterprise, McGrawHill.
- [12]諸富徹, 2010, 地域再生の新戦略, 中央公論新社
- [13]Nonaka, I. and Konno, N., 1998, The Concept of "Ba": Building a Foundation for Knowledge Creation, California Management Review Vol. 40, No. 3, Spring1998
- [14]大江正章, 2008, 地域の力: 食・農・まちづくり, 岩波新書 (新赤版) 1115
- [15]岡田浩一ら, 2006, 地域再生と戦略的協働, ぎょう

せい

[16]大分大学福祉科学研究センター, 2011, コミュニティ
カフェの実態に関する調査結果

[17]Rogers, C., 1942, Counseling and Psychotherapy,
Newer Concepts in Practice.

[18]坂倉杏介, 2010, 地域の居場所からのコミュニティ
づくりー芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成
を事例に一, 慶應義塾大学日吉紀要社会科学, 第21号,
pp. 63-78

[19] 妹尾香織, 高木修, 2003, 援助行動経験が援助者自
身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られ
る援助成果, 社会心理学研究 18(2), pp106-118

[20] 高坂康雅, 2011, 共同体感覚尺度の作成, 教育心理
学研究 59(1), pp88-99

[21]田中重好, 2010, 地域から生まれる公共性ー公共性
と共同性の交点ー, ミネルヴァ書房

[22]津々木晶子ら, 2011, システムズ・アプローチによ
る住民選好の数量化・見える化: 中心市街地の新しい政
策創出の方法論, 関東都市学会年報 第13号, pp. 110-116

[23]山浦晴男, 2010, 住民・行政・NPO 協働で進める 最
新地域再生マニュアル, 朝日新聞出版

Abstract

The purpose of this paper is to figure out the factors that the visitors of local community place start up voluntary activities at their own initiative. In order to clarify the mechanism of voluntary activity creation, we proposed a model to analyze as a gradual process of self-realization through the cooperation action. Then we analyzed the behavior of visitors in "Shiba-no-Ie" that is a typical local community place by questionnaire investigations and interview researches using this model. The evaluations showed that the visitors started up activities voluntarily through three stages, and the factors promoting the activities of visitors were changes in the internal motivation through relationships with others, enough time for preparing to start up, and appropriate supports of staffs.

